

【14】

氏名（本籍） 武 田 修 一（東京都）

学位の種類 文学博士

学位記番号 博甲第44号

学位授与年月日 昭和55年1月31日

学位授与の要件 学位規則第5条第1項該当

審査研究科 文芸・言語研究科 言語学専攻

学位論文題目 Reference and Noun Phrases（指示と名詞句）

主査 筑波大学教授 文学博士 安 井 稔

副査 筑波大学教授 文学博士 佐 藤 房 吉

副査 筑波大学助教授 Ph.D. 中 右 実

副査 筑波大学助教授 島 岡 丘

論 文 の 要 旨

本論文は、対象を現代英語に限り、名詞句にみられる指示性という機能に関する諸問題を統一的に、また、包括的に論じようとしたものである。

名詞句の指示作用に関する研究は、伝統的な英文法研究においては、ほとんど顧みられなかった分野であり、さらに言うなら、問題の所在さえ、明確には気づかれていなかった分野である。これが活発な議論の対象となるに至ったのは、変形生成文法理論的基盤に立つ Karttunen (1968) 以来のことであるとしてよく、近々十年來のことであるにすぎない。

言語表現の指示性という問題は、本来、言語の世界と現実世界との間における対応関係を中心課題とするものであり、その、いわば、核をなすのが、通例、「冠詞＋名詞」の形から成る名詞句である。これが言語の使用における最も基本的な部分の一つであることは言うをまたないであろう。けれども、言語表現と現実世界とのかかわり合い方は、決して、一様ではなく、その種々相のとらえ方によって、諸家の見解は錯綜し、大体の傾向から言えば、収束的であるよりは、拡散的であるのが現状である。

例えば、英語の名詞句は、「不定冠詞＋名詞」によって代表される不定名詞句と、「定冠詞＋名詞」によって代表される定名詞句とに大別され、いずれの場合においても、指示性ということが問題になってくる。が、そのどちらの場合においても、意見の一致はみられていないのである。ましてや、不定名詞句と定名詞句とを、その指示性に関し、統合的に扱おうとするわく組みは、ほとんど提案

されていないに等しい。

このように、諸学者の見解が錯綜する指示性という問題に関し、本論文は、以下にみるごとく、入手しうるほとんどすべての文献を参照し、しかも、一次的な資料に基づく言語事実を絶えず考慮に入れながら、綿密な比較、検討を加え、独自の統一的なわく組みを提案している。それは、まず、不定名詞句にみられる指示性に徹底的な再検討を加え、さらに、不定名詞句の指示性と、定名詞句の指示性との間にみられる平行性を抽出し、名詞句のもつ指示性に関する諸問題に、首尾一貫した説明的記述を与えようとしている意欲的なものである。

論文の構成は、第1章から第4章に至る四つの章から成っており、以下、その概略を述べる。第1章「序論」においては、名詞句にみられる指示現象の概観と問題点の指摘、および、検討が行われている。特に、指示性と密接な関係のある特定性 (specificity) という概念に関する用語上の混乱に関する指摘がなされ、他方、指示性を全くもたず、単に記述的な機能しかもたない不定名詞句 (例えば、*Patricia is beautiful like a rose. / Jommy is writing a letter.*) の存在、あるいは、単純名詞句と文名詞句 (sentential noun phrase) との間にみられる平行性などに対する指摘もなされている。

第2章「特定性、指示性、および、不透明性」においては、三つの重要な点が詳細に論ぜられている。一つは「特定性」の定義に関する問題である。本論文の著者は、不定名詞句の特定性・非特定性に関し、これまでに提案されてきている数種の定義がいずれも不備であることを指摘し、独自の定義を提示するが、注目すべきは、著者が、終始、名詞句の指示機能という原点に立脚し、経験的資料に基づきながら、この問題に、矛盾のない説明を試みているという点である。第二の重要な点は、Donnellan (1971) で提案されている「指示的」(referential) 対「限定的」(attributive) という、定名詞句表現にみられる対立を、いわば、因数分解し、この対立は、「定性+特定性」対「定性+非特定性」という素性複合体に還元できるとしている点である。第3の重要な点は、不透明な文脈に置かれた不定名詞句が許容する意味解釈の種々相を克明に追求しているという点である。

第三章「指示作用の文脈依存面と文脈非依存面」は、英語の名詞句がもつ指示作用の解明には、二つのレベルを区別する必要があることを、具体的な言語事実に即して論ずる。著者の達している結論は、文脈に「確実性的法性」(certainty modalities) が含まれている場合、不定名詞句は、文脈非依存面において特定性・非特定性を選択する余地を与えられず、すべて、特定のとなり、文脈に「不確実性的法性」(uncertainty modalities) が含まれている場合、不定名詞句は、文脈非依存面において特定性・非特定性を選択する余地を与えられ、あいまいとなる。」というものである。この優れた着想は、従来、どの学者によっても提案されたことのないものであり、しかも、特定性・非特定性に関する困難な諸問題を見事に解決することのできるものである。例えば、法構造に関して、従来提案されてきた理論の中では最も整っていると考えられる Jackendoff (1972) の理論においても解けない事例を著者は提示し、それが著者のわく組みにおいて、余すところなく解明できることを示している。

第4章「指示作用の意味理論」は、これまで述べてきたことの総括であり、一種の検算の役を果

たしている章である。すなわち、名詞の指示作用をめぐる多くの問題が、本論文で提示されている理論的わく組みで過不足なく説明できるということが、多くの問題とされる事例について検証されているが、同時に、その過程において、わく組み自体もさらに精密化され、文脈に依存したレベルで適用される意味条件と、文脈に依存していないレベルで適用される意味条件が提示されている。

## 審 査 の 要 旨

本論文の最大の特徴は、一言でいうなら、統一的なわく組みの設定と、それを支える精緻な分析にある。すなわち、本論文は、名詞句にみられる指示性という込み入った問題を扱うに際し、これまでどの学者によっても提出されたことのない統一的なわく組みを提示し、このわく組みに基づいて、詳細かつ綿密な分析を加えているほとんど唯一の研究であり、高く評価することができる。特に、錯綜する諸家の説を新しい観点から整理し、言語事実と整合する形で再編成しているのは大きな貢献であり、これによって、従来不明確なままであった問題がきれいに解けるようになっていることは注目に値する。

例えば第2章において、特定性の定義の中に集合の概念と相対性という概念を組み入れているのは独自の見解であり、I talked with a logician. の a logician に許されるのは特定の解釈のみであると、特定の解釈と非特定の解釈の両方が可能であるとする Karttunen の説を退けているのは卓見である。定名詞句に関する指示的用法と限定的用法という Donnellan の主張する区別を特定性という軸に基づいて述べ直している部分も本論文においてはじめて提案されているものであり、著者の粘り強い思考力と洞察力をみることができる。第3章において、指示作用に文脈依存的な面のあることを指摘し、それを、いわば、核として、文脈非依存的な面を考察しているのは、一種の逆転的発想を含むものであり、変形生成文法的接近法にみられがちな不備を補う観点としても重要である。

以上のことは、もちろん、本論文に論じ足りない点や不備がないことを意味するものではない。例えば、文脈依存・非依存というような用語の選択と使用には、慎重な配慮にやや欠けるところがあると思われる。不定名詞の特定・非特定性の決定基準同士の間には、一種の階層性、あるいは、論理的含意関係を認めることができると思われるので、これを、意味論と語用論との一般的な関係に還元して考えるなら、その議論は、さらに説得力のあるものとなったであろう。名詞句のもつ指示機能は、主として、意味論に傾斜している分野に属するものであるが、これが統語論の分野にどのようなかわりをもつかという点を一貫して追求するものも残されている問題である。この論点を押し進めてゆくと、日本語には、どうして、冠詞がないのであるか、名詞句の指示性はどうなっているかというごとき問題に発展してゆくことが予想される。が、これらは、いずれも、今後に残された問題であり、本論文が、それだけでまとまりのある名詞句の指示作用に関する論考であることに変わりはない。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。